

17 世紀日英における若者向け作法書 — その普及と背景

高野美千代

The Background of Seventeenth-Century Conduct Books in England and Japan

TAKANO Michiyo

Abstract

In the seventeenth century, a literary genre of conduct books for young people appeared in both England and Japan. Richard Brathwaite's *The English Gentleman* (1630) and *The English Gentlewoman* (1631), and Johaku Namura's *Onna Chohoki* (1690) and *Nan Chohoki* (1691) are examples of this genre, and are the subjects of this study. The target readership of these books was young people, and in both instances, a single author wrote for both young men and young women. This genre flourished in the midst of the early modern period, when people aspired to sophistication and knowledge. Braithwaite's "gentleman" and "gentlewoman" were modelled on the perfect Italian courtiers and ladies described by Castiglione, and established the social principles and disciplines in early modern England. In the last decades of the seventeenth century in the Edo period in Japan, people had a similar attitude toward learning and sophistication, and Namura's books sated their thirst for knowledge about social conduct. More and more people were believing that good manners and well-cultivated tastes were essential for a good life. The flourishing of the conduct book genre also indicates the fact that many young people in both England and Japan were reading books and that the publishing industry was developing remarkably. This study concludes that the four books of this genre discussed here reflect common characteristics of early modernism in the two countries.

key words: Richard Brathwaite, *The English Gentleman*, *The English Gentlewoman*, conduct book, 苗村丈伯、『女重宝記』、『男重宝記』

はじめに

17世紀英国の書物を同じ頃の日本の書物と比較してみると、浮かび上がる共通点のひとつに、若者向けの作法書が書かれ始め、それが人気を博したことが挙げられる。社会的立場が優位であった男子の教育が重視されていたかと思えば、実際のところは男性向けと女性向けの両方があった。さらに、同一の著者が男女それぞれに向けた書物を執筆している例が日英共通して見受けられる。この点に注目すると、英国では1630年代に若い男性向けの『イングランドの紳士』*The English Gentleman*、若い女性向けの『イングランドの淑女』*The English Gentlewoman* がリチャード・ブ

レイスウェイト (Richard Brathwaite, 1587/8-1673) によって著され、日本では苗村丈伯 (生没年不詳)¹⁾ による『女重宝記』、『男重宝記』が1690年代に世に出されたことを例に挙げることができる。いずれも若い年代の読者を想定して書かれている。本論考では、主に書物史の観点からこれら4作品を取り上げる。そして近世という時代において、東西それぞれの国でこれら書物が制作され普及した背景となる事項を考察したい。

東西の近世作法書

この論考で扱う「作法書」という語は、しかるべき振る舞い、持つべき教養、心得、マナー、エ

チケットを示した本を指すものとする。西欧では古くから主に貴族や紳士階級の子息を対象とする「コンダクト（品行、振る舞い）」を扱った書物が書かれていて、それらは「コンダクトブック」というジャンルで知られていて、これにあたるものとして本稿では「作法書」という語を用いることとする。ヨーロッパのコンダクトブックの歴史は長く、作品は多様であるため、ここでは英国に影響を及ぼした主な作品を2例のみ紹介しておきたい。

英国ルネサンス期には、人間の道徳的任務を果たすことを説くキケローの『義務について』が読まれるようになった。これはキケローが息子に宛てて書いた一種のコンダクトブックで、紀元前44年の作品である。²⁾ 良識ある人間としての生き方、振る舞い、道徳的義務の果たし方等を扱った書物であった。親が子に教えるように、年配者が若輩者を導くように、人間の精神は学習と思考によって養われることや、節制・節度が重要であることなどが説かれている。この書物は、ルネサンス期イタリアにおいて再評価された古典のひとつであり、その流れが英国に至ったのである。1534年にはロンドンでラテン語・英語の対訳版が出されていて、その後、ジェイムズ朝までに英語訳は10回を超える出版がなされた。英語では *Of Duties* と訳されることが多く、日本語訳では「義務」という言葉を題名に使ったが、これは社会で果たすべき役割、行うべき行為のことである。『義務について』はキリスト教に基づいた教えではないものの、チューダー朝からスチュアート朝の英国では、イートンカレッジをはじめとする名門校において標準的な教材として読まれるようになっていた。³⁾ したがって、ブレイスウェイトを含め、当時の英国紳士は、若いころにこの作品に触れていたこととなり、少なからず影響を受けていたと考えることができる。

英国で強い影響力を持ったもう一つのコンダクトブックとしてよく知られ、宮廷人の理想像を描いたカスティリオーネの『廷臣論』は、1528年にイタリア・ヴェネツィアで出版され、その後まもなく英語に翻訳され普及した。⁴⁾ この本は宮廷

人の模範的な姿を示すものとして大いに読まれたもので、トマス・ホービーによる英語訳は1561年から数回にわたって出版されており、その人気をうかがい知ることができる。作品は4部に分かれていて、第一の書では宮廷人に必要な条件がたとえば勇敢な武人であること、慎みを知っていること、文学に造詣があることと書かれている。第二の書においては宮廷人のたしなみの例として会話、服装、ダンスなどが挙げられている。第三の書は英訳者ホービーがまず翻訳した部分と言われるが、貴婦人の理想像が描かれている。女性に求められる徳が思慮深さや賢明さ、ダンスや音楽の素養などとしている。第四の書は君主と宮廷人との関係についてであり、信頼関係があれば君主に対しても必要な助言を宮廷人は行うことができるとする。

エリザベス朝においては、『廷臣論』の愛読者であったとされるサー・フィリップ・シドニーがいた。彼は有名貴族の家系に生まれ、勇敢な軍人であると同時に珠玉の作品を残した恋愛詩人としてエリザベス朝を代表する宮廷人であった。『廷臣論』では、真の宮廷人たるもの文武両道かつ品行方正であるとされていた。1578年に没した後、世紀が変わってもなおサー・フィリップが人々の憧憬の的であったのは、彼がカスティリオーネの描いた理想の宮廷人の具現とみなされたためである。⁵⁾

一点付け加えておくが、『廷臣論』は主に男性の宮廷人の完成された姿を言葉で表現しようとするものだが、実際には女性に関する記述も多い。その中で、女性は男性と同等であるとされている。たとえば、第三の書においては、女性は様々な分野で能力を発揮してきたことが過去の例にもあり、女性が男性に劣るということはない、と書かれている。後で扱う日本の作法書では男尊女卑、女性蔑視といった部分を論じられることもあるため、ジェンダーの観点からこれらの作品群にアプローチすることも有意義であろう。しかしながら、本論考においては書物史の側面から作品とその背景を考察することを目的としているので、そのことに限定して論じたい。

キケローの『義務について』、カスティリオーネの『廷臣論』、いずれの書物もルネサンス期のイングランドにおいて、洗練された礼儀作法や教養を身につけるための教材として普及し、生活文化に浸透していった。『廷臣論』においては、宮廷人の目的は「いつでも君主が知っておくとよいことがらのすべてについて、なんらの恐怖もなくまた君主を不快にすることもなしに、真実を直言できました直言すること」とされている。つまり、「自らのうちに善性を身につけ、敏速な才能と好感と深謀熟慮とを、さらに文学やその他もろもろの知を兼ね備えて、あらゆる問題に関して、正義と寛容と度量と穏健とその他善い君主に相応しい諸徳から、どれほどの名誉や有益なことどもが君主及びかれに従う人々に生ずるか」ということ、そして「悪徳からはどれほどの不名誉と損害が生ずるか」を示すべきだとしている。⁶⁾ つまり、当然立場は異なるにせよ、君主に代わってあるいは君主の立場で物事をとらえる思考力と判断力を備えることが宮廷人の理想とされていることになる。別の見方をすれば、人々は自分自身よりも上の階層における思考や行為の規範を修得することが望まれていたという意味となる。

そののち、英国人による作法書も、つぎつぎと登場した。国王ジェームズ一世は皇子のために『王子への贈り物』(*Basilikon Doron*)を著した。これは為政者という立場となる(はずであった)皇子に向けているという点で特殊な例ではある。国王ジェームズからヘンリー皇太子に書簡体で書かれており、1599年にエジンバラで、1603年からはロンドンでも出版された。その他、1622年に出版されたヘンリー・ピーチャムの『完全なる紳士』も作法書早期の例である。⁷⁾ 紳士は必ずしも貴族に限らないわけであるので、「紳士(gentleman)」という言葉自体、定義が困難になりつつあった。つまり、時代的には新興富裕層の台頭があって、その状況に応じたアドバイスが求められるようになった時代だったと言えよう。英国では武勇を重んじる騎士道の時代から、精神的な成熟と豊かな人間性に基づく判断力が必要とされる時代へのいわば過渡期であった。ピーチャム

はヨーロッパ大陸諸国に比べて中世的な感覚が残る英国における教育のお粗末さを認め、それを改善することを願って執筆を行ったことがうかがえる。たとえば、作品の冒頭でピーチャムは、現在の英国の教育が若者に「最高の服を着て、食べ、寝て、たらふく酒を飲み、無知であること("to wear the best clothes, eat, sleep, drink much, and to know nothing")」しか教えないと不満をもらしている。彼は王族とくにヘンリー王子にも近い人物で、『王子への贈り物』を基にしたエンブレムブックを執筆したこともあったが、『完全なる紳士』では、より幅広い読者層を念頭にたとされる。⁸⁾

英国ではコンダクトブックに多様な作品があるが、それは著者が誰を対象にしたか、何を伝えようとしたか、という点で大まかに分類することができる。本論考で扱いたいのは、貴族に限らずそれ以外の若者にとっても有用であると思われる教えや知識を示す作法書である。この点で、日本の重宝記を並列してみたい。重宝記という類の書物は、一般に、教訓や日常生活の知識を盛り込んでおり、幅広い領域に関わるものである。⁹⁾ その中から、本論考ではとくに若い男女に対して、しかるべき行儀作法やたしなみ、知識を扱うという点が共通する2作品『女重宝記』、『男重宝記』を取り上げることとする。重宝記は、コンダクトブックとは一部重なる部分もありながらも異なる類の読み物である。江戸時代に普及した日常的な知識教養を扱う書物であって、元禄以前に端を発する。元禄6年に出版された『男重宝記』においては、当時、約10点を数えるほどの重宝記がすでに出版していたと記されている。また、元禄期全体では『女重宝記』、『男重宝記』の再版を含めて数十点の重宝記の刊行があった。江戸幕府の文治政治による効果であると思われるが、17世紀後半には農村を含む人々の間にも教育への関心が高まり、女子も手習いをし、本を読むようになっていた。¹⁰⁾ 重宝記は古くからの知識の蓄積を、わかりやすく書き記したものであった。『女重宝記』も『男重宝記』も、仮名を添え、挿絵を取り入れて、一般の若者にとっても理解しやすい本となる

よう工夫がなされている。その後、18世紀以降に重宝記はさらに多様なニーズに応えるように世に出て人々に読み継がれていった。初期の重宝記には教育的な要素が濃く、扱う事柄も幅広いので、のちの重宝記のように実用的あるいは専門的な細分化された内容とはなっていない。この点では、コンダクトブックと通じるものがある。英国ではむしろ18世紀以降、コンダクトブックの数が増え、一般家庭の子女の教育に便利に使われるものが多く現れるようになった。日本では貝原益軒の『和俗童子訓』（1710年）、その一部を基にした『女大学宝箱』（1716年）を時代的にも内容的にも近い作品として挙げることができよう。『女大学宝箱』は『女大学』として、明治期に至ってもなお受容されていた。このように、17世紀以降、日英両国において若い男女が知識教養を身に付けられるような作法書の普及が見られるようになった。

著者について

『イングランドの紳士』の著者リチャード・ブレイスウェイト¹¹⁾は日本国内ではほぼ無名の作家であるため、ここに伝記的情報を端的に記したい。彼はイングランド北部、カンブリアのバーンサイドで、バリスター（法廷弁護士）のトマス・ブレイスウェイトを父として生まれた。¹²⁾ 1626年に描かれた彼の肖像画に年齢38歳と書かれているので、1587年あるいは1588年の生誕と推測されている。リチャードは、1604年頃よりオックスフォード大学、そしてケンブリッジ大学で学び、そののち1609年頃からロンドンのグレイズインで法律を修めた。ロンドンでは詩や戯曲を書いたというが、作品は残っていない。また、ブレイスウェイトは著作の中で都市ロンドンや宮廷の様子を書いているが、実際のところ彼がロンドンでどのような暮らしをしていたか、詳細はわかっていない。1617年に結婚し、田舎に戻って官職につき、領地の管理を行っていたという。

ブレイスウェイトは多作であった。ラテン語だけでなくイタリア語にも精通していたため、多くの書物を読み、翻訳はもちろん、原典からヒント

を得て独自の作品を執筆した。ペンネームあるいは匿名で出された作品も複数ある。作家としての絶頂期は1610年代から1630年代頃であったとみられるが、実際には、彼は晩年になるまで執筆活動を継続していたし、没後もなお人気を博した作品もあった。もっともよく知られた作品は、1638年に匿名で出版された『バーナビーの旅日記』（*Barnabæ Itinerarium, or Barnabee's Journal*）で、特につぎの一節が人口に膾炙した。

To Bambury came I, O profane one!
Where I saw a puritane one
Hanging of his cat on Monday
For killing of a mouse on Sunday.

旅の道中、安息日である日曜日にネズミをやっつけてしまった猫を、月曜日に清教徒が処刑するのをバンベリーで目撃したという意味である。清教徒に対する風刺を効かせた一節である。オックスフォード近くのバンベリーという土地は、16世紀以来、熱狂的な清教徒が多い地域として知られていた。本来ならば日曜日は安息日、すなわち仕事をしてはならないとされる日である。ところが猫は安息日を破り、本来の仕事であるネズミ退治をしてしまったのだ。安息日を破ることを死に値する大罪として扱う極端なピューリタニズムを、ロイヤリストのブレイスウェイトはこのように揶揄したのであった。この著作では、故郷のケンダルと、かつて住んだロンドンの間を、異なる4つのルートでたどる旅を歌っていて、同時代人にとっては、地理や旅行への関心興味がそそられる作品であったようで、これも近世的な特徴だと言えることができる。この作品は19世紀半ばまで版を重ねている。

『バーナビーの旅日記』と同じ1630年代にブレイスウェイトの作法書は出版された。『イングランドの紳士』は1630年、『イングランドの淑女』は1631年に初版が出された。その後1641年にこの2作品は合本となって出版されたのであるが、その理由は言うまでもなく2冊が好評を博したためであろう。内容は、社会的、社交的な行

儀とエチケツトを中心とするものである。ブレイスウェイトは市民革命と王政復古を経験し、北部イングランドに暮らしながら晩年まで執筆をつづけた。1669年に最後となる著書が出版されているので、年齢は実に80歳を超えていたということになる。

『女重宝記』、『男重宝記』の著者、苗村丈伯については伝記的情報があまり得られていない。艸田寸木子、艸田子三徑と名乗ることもあった。もとは近江彦根藩の侍医であったとの説もあるが、元禄初期には京都で実用書や古典の解説を執筆している。医師であったことを納得させるような内容が『女重宝記』に散見される。先行文献からの引用が多いとは言え、女性の懐妊と出産については図入りで詳解したり、生活に必要な薬の調合法などを紹介したりしている。また、苗村は重宝記を4点出版している。『女重宝記』、『男重宝記』に加えて、元禄7年(1694年)には『武家重宝記』と『年中重宝記』という著作がある。苗村のあと、多種多様な重宝記が制作されて世に出回ったことから、苗村は重宝記を江戸の書物文化に定着させた草分け的な作家とみなすことができる。

作品の出版と受容

1630年に初版が刊行されたブレイスウェイトの『イングランドの紳士』については、印刷業者はジョン・ハヴィランド(John Haviland)、販売者はロバート・ボストック(Robert Bostock)であった。¹³⁾ ジョン・ハヴィランドについての伝記的情報はほとんどないが、1613年から38年までの経歴において100点以上の出版物を世に出している。1637年には星室庁が認める印刷業者であるマスタープリンター20名のうちの一人に選ばれたというので、有力な業者であったことは間違いない。ブレイスウェイトの作品については1620年代に2点の本を出版している。したがって、『イングランドの紳士』以前の早い時期から、著者ブレイスウェイトと出版者ハヴィランドのつながりは存在していたことになる。販売者であったボストックは、1629年からキングズヘッドという屋号で商売を始めた。『イングランドの紳士』

は彼が扱った初期の本である。初版は約450頁のクォート判であった。冒頭の版画以外、ほとんどのページに小さな文字がぎっしりと詰まっている。第2版(改訂・増補版)はわずか3年後の1633年に出版されたが、その際の印刷業者はハヴィランドではなく、フェリックス・キングストン(Felix Kingston/Kyngston)およびリチャード・バジャー(Richard Badger)に変わった。キングストンは有力なロンドン出版業者のひとりで、国王からの信頼も厚い人物であり、一方のバジャーも、ウィリアム・ロード大司教の説教を出版するなど、やはりロイヤリストとして存在感のある出版者であった。『イングランドの紳士』販売取り扱い業者は第2版でも変更がなく、ロバート・ボストックであった。ボストックは神学書を多く出版していたが、1640年代には議会派のパンフレットを発行していたことでも知られている。ブレイスウェイトの著作については、『イングランドの紳士』以外にも、妻への追悼詩など複数点をキングストンと共同で扱った。

一方の『イングランドの淑女』の出版者はベンジャミン・オルソップ(Benjamin Alsop)とトマス・フォーセット(Thomas Fawcett)である。オルソップは、1620年にブレイスウェイトの『放蕩息子の涙』を扱っている。彼が出版あるいは販売を扱った書物の数は200を超え、幅広い領域の本を世に送り出した。フォーセットは1625年頃からオルソップのビジネスパートナーとして共に出版活動を行った。販売を扱ったマイケル・スパーク(Michael Spark)は聖書の独占販売に反対する立場を取り、その値段の高さを問題視して、自らオランダより聖書の輸入を行っていた。清教徒弁護士ウィリアム・プリンの作品を出版して罰金刑を受けるなど、上記の書籍業者とは一線を画す人物である。

『イングランドの紳士』の口絵はロバート・ヴォーン(Robert Vaughan)による。クォート判、本文220ページで構成されている『イングランドの淑女』の口絵はウィリアム・マーシャル(William Marshall)の作である。ヴォーンもマーシャルも当時のロンドンで活躍した版画家であっ

た。ヴォーンは『イングランドの紳士』のあと、1650年代に再びブレイスウェイトの著書の口絵を作成している。マーシャルの最初の作品はブレイスウェイトが1617年にペンネームで出版した作品の口絵とされている。1641年の『イングランドの紳士・イングランドの淑女』合本においては、口絵の版画はマーシャルによる。口絵には、各章の象徴的図が刻まれており、書物全体の概要が描かれている。ただし、初版の版画と合本の版画を比べると、細部においては異なる部分がある。口絵の詳細については後で説明することとする。1641年の合本『イングランドの紳士・イングランドの淑女』の出版者はジョン・ドーソン (John Dawson) である。彼は当時のロンドンにおいて手広く活動を行っていた書籍商で、主要なところではベン・ジョンソン (Ben Jonson) やジョン・ダン (John Donne) の作品出版に携わっていた。

『女重宝記』は元禄5年、『男重宝記』は翌6年に刊行された。発行部数は不明であるが、繰り返し再版されるほどの人気を博した。『男重宝記』の序の部分で、苗村は『女重宝記』5巻が世に出されて以来、「摺写する事いとまなし」と書いている。『女重宝記』が出版されて1年の間に既にかなり高い人気を得たことがわかる。初版は三都版で、江戸の萬屋清兵衛、大阪の伊丹屋太郎右衛門、京都の吉野屋次郎兵衛による出版とされる。¹⁴⁾ また、この3名は『女重宝記』のあと、『世話重宝記』という別の重宝記を元禄8 (1695) 年版行した。『女重宝記』、『男重宝記』ともに半紙を二つ折りにした半紙本で、いわば手ごろなサイズである。ともに複数の版と異本があるのだが、十行から十二行本が主で、各巻が18から21丁ほどで成る。

執筆の背景

執筆の背景の一端を知るために、『イングランドの紳士』を著者が誰に宛てて献辞を書いたかに注目したい。近世英国書物の場合には、著者は、パトロンや友人など、何らかの形で出版のサポートをしていた人物に著書を献呈していることが主である。金銭的に、たとえば出版費用を補助して

もらっていたとか、あるいは作品の執筆の際に知的インスピレーションを与えられたり、金銭以外の援助を提供してもらったりするなどして、著者はその行為に対する謝意を献呈の辞において述べることとなる。もちろん、直接的な恩恵を被っていなくても、将来起こりうる何らかの効果を期待して相手を選ぶことも想定できる。すなわち、献辞によって、著者と献呈した相手との関係が明らかになることから、著者の政治的宗教的なスタンス、思想信条的な部分を読者が知ることも可能となる。また、著名な人物に作品を献呈することで、本自体の権威付けがなされることも当然あり得る。

『イングランドの紳士』初版はトマス・ウェントワース (Thomas Wentworth, 1593-1641) に献呈されている。ウェントワースはこの本が出版された1630年時点で北部評議会議長 (Lord President of the North)、枢密院顧問官 (Privy Councilor) を務めていた。ウェントワース家は、北部イングランド、ヨークシャの名門一族であり、『イングランドの紳士』出版当時、トマス・ウェントワースは北部イングランドの政治をつかさどる有力なロイヤリストであった。言うまでもなく宮廷でもチャールズ一世の信頼を得るようになり、前途が囑望される人物となっていた。

『イングランドの淑女』はウェントワースの妻、アラベラ・ウェントワース (Arabella Wentworth, c. 1594-1631) に献呈された。紳士と淑女で一对になるため、この本がウェントワース夫妻に献呈することになったのは自然のなりゆきとも言えよう。アラベラについては伝記的情報が豊富にあるとは言えないが、トマス・ウェントワースにとっては2人目の妻であり、その美貌がウェントワースを強く引き付けたと言われている。ノッティンガムシャのクレア伯爵の娘として生まれ、ウェントワースとは1625年に結婚した。『イングランドの淑女』が出版された翌年、逝去している。アラベラの実家であるホールズ家には、当時宮廷で力を持っていた人物が複数おり、ブレイスウェイトにとって著作をアラベラに献呈することには、付加価値があったのではないだろうか。

『イングランドの紳士』と『イングランドの淑女』が1641年に合本として出版された際、ブレイスウェイトは作品を別の人物に献呈した。まず、『イングランドの紳士』はフィリップ・ハーバート、第4代ペンブルック伯爵（Philip Herbert, 4th Earl of Pembroke, 1584-1650）に対してである。宮内庁長官を務めたハーバートは、芸術文化のパトロンとして知られた人物で、シェイクスピアのファーストフォリオを含めて数十点の書物が彼に献呈されている。名門シドニー家の血を引く貴族であり、宮廷で権力を持っていた人物であるが、実際のところ『イングランドの紳士』が出版された頃には、ウェントワースや国王チャールズ一世とも関係がこじれており、ちょうどこの本の出版年である1641年には宮内庁長官を解任され、国王との対立が明らかになっていた。こうしてみると、ブレイスウェイトが著書をハーバートに献呈する意義があったのかあるいは期待する効果・反応のちに得られたのかどうか、いささか疑問である。

一方の『イングランドの淑女』は、アン・クリフォード（Anne Clifford, 1590-1676）に献呈されている。アン・クリフォードはハーバートの妻であった。彼女はブレイスウェイトと同じ北部イングランド出身で、1630年にペンブルック伯爵夫人となつてからは宮廷で大きな影響力を持つようになっていた。文芸に造詣が深く、自身も作品の執筆を行い、当時の主要な作家たちと交流を持っていた。ただし、1630年代前半には、ペンブルック伯爵とアン・クリフォード夫妻は不仲によって別居するようになっていた。内乱に向かう時代の中、夫が議会派を支持したのに対して、アンはロイヤリストの立場を維持した。クリフォード一族は北部イングランドにおける名門貴族で、ウェントワースの最初の妻もクリフォード家の一員であった。ブレイスウェイトは、宮廷で権力のある人物で、そのうえ自分自身の故郷である北イングランドに所縁のある貴族としてアン・クリフォードを選んだと推測できる。そして、この『イングランドの紳士』と『イングランドの淑女』は一對となっていることから、献呈する相手は夫婦

であることがやはり望ましかったのであろう。初版をウェントワース夫妻に献呈していたのだからなおさらのことである。出版された時点での状況を鑑みると、ブレイスウェイトにとっては、アン・クリフォードこそが、夫のペンブルック伯爵よりも重要であったのではないか。国内で最も富裕であった女性貴族のアンであるが、自身は儉約家でありながら慈善を尽くし、敬虔に生きたことから、まさに『イングランドの淑女』を献呈されるのにふさわしい人物であったことがうかがえる。

『女重宝記』については、著者が誰かに献呈しているものではないが、執筆の目的の一端が作品の冒頭部分に記されている。それは、序において著者が「女の善を述べあらわして、かのひがみを揉なをし、女の覚へてよき事を書あつめて、かの拙を直ならしめ申候」というもので、すなわち、女性はひねくれて、つたない人間であるので、それを直すために必要な善をこの本に記すのが目的ということである。著書を献呈する相手が女性の模範となっているブレイスウェイトの例とは異なり、『女重宝記』では女性は天照大神の流れを引き継ぎ、神代はもちろん上代までの女性は優れていたのだが、世の末である「現在」では非常に劣っているという考えが見受けられる。この状態から脱却するためにも必要とされる様々な知恵や知識を5冊の本に記載していくこととなる。

『男重宝記』も、献呈する相手はいないが、やはり序の部分では執筆の背景に触れている。序でわかることは、『男重宝記』は、先に刊行した『女重宝記』が非常に好評であったので、これに対して男重宝記も書いてほしいと、苗村が本屋から依頼を受けたことである。そもそも重宝記は本屋主導で企画出版がなされるものであった。¹⁵⁾『男重宝記』出版は京都の中川彦三郎、同じく大和屋勘七良とされる。この2名は『女重宝記』を出版した本屋とは異なるので、重宝記の評判を目の当たりにして自らも出版を構想したということになる。そして苗村は自身が若いころから聞き覚えたことを若い男子のために書き記すこととした。当時すでに重宝記という部類の書物は複数出版されていたが、「先書になき事どもを、余が若年の比

より聞おぼへたるままに書集め、童男の知て重宝とするものなり。大人男子のためにするにあらず。」と『男重宝記』には書かれていて、前提とする読者層を明らかにするなどして、他の重宝記との差別化を図っている。また、苗村は、今の世の人は怠惰で無知であり、勉強が不足していると指摘し、男子たるものは、「読書学文の芸を第一と心得給ふべし」と言っている。ブレイスウェイトと苗村がそれぞれ扱った具体的なテーマについてはつぎの項で扱うこととする。

構成

ブレイスウェイトの『イングランドの紳士』と『イングランドの淑女』には、17世紀英国の若者が身につけるべきエチケットや教養が記されている。まず、1630年に出版された『イングランドの紳士』(*The English gentleman, containing sundry excellent rules, or exquisite observations tending to the direction of every gentleman, of selecter ranke and quality, how to demean or accommodate himselfe in the manage of publike or private affaires*) であるが、タイトルに示されるように、しかるべき身分にある紳士が、公事、私事双方において適切に身を処することができるようにするための指導書である。若者が陥りやすい過ちを警告し、「若さ」、「性質」、「教育」、「職業」、「余暇」、「交際」、「節度」、「完成」(youth, disposition, education, vocation, recreation, acquaintance, moderation, perfection) の8テーマを扱う。

一方の『イングランドの淑女』(*The English gentlewoman, drawne out to the full body: expressing what habilliments doe best attire her, what ornaments doe best adorne her, what complements doe best accomplish her*) では、好ましい衣装や装飾品あるいは女性の不足を補うものについて示している。具体的には、「装い」、「振る舞い」、「礼儀」、「品位」、「節操」、「審美眼」、「優雅」、「名誉」(apparel, behavior, complement, decency, estimation, fancy, gentility, honour) といったテーマに沿って順に教えを説いている。

男女それぞれ8項目ずつのテーマは、口絵にも明らかに示されている。近世英国の書物の口絵は読者を本の内部に誘う入口のような役割を果たし、豊かな情報を含蓄する例がたびたびある。『イングランドの紳士』『イングランドの淑女』もその一例とみなすことができるので、ここで説明したい。前に触れたように、口絵の制作は初版『イングランドの紳士』はロバート・ヴォーン、1631年『イングランドの淑女』と合本はウィリアム・マーシャルによる。ヴォーンによる口絵は非常に印象的であり、中央に描かれた若く美しい「紳士」は著者ブレイスウェイト本人とも目される。ページは縦3列に分かれていて、さらに左右の列はそれぞれ4段に分かれ、それぞれの枠にひとつずつ、合計8つのテーマ（「若さ」、「性質」、「教育」、「職業」、「余暇」、「交際」、「節度」、「完成」）がエンブレムのように細かく描かれている。マーシャルによる『イングランドの淑女』の口絵版画も同じ構図である。そして、合本の口絵ではマーシャルがこれら2枚の版画を基にして、『イングランドの紳士』部分を一枚の版の左側に、『イングランドの淑女』部分を右側に描いた。元の版画と比べると、紳士と淑女の姿をはじめ、その他の詳細も変わっているところが見受けられるのだが、ここでは合本の口絵についての説明をしたい。

大枠は以前のものと同じであるが、タイトルはちょうど版画の中心部分、コリント様式の円柱の間に示されている。中央の列は縦に3分割されていて、その中央部分にタイトルがおさまっている。タイトルの左側には、きれいに着飾りステッキを持ってたたずむ紳士が描かれる。ロバート・ヴォーンによる1630年の「紳士」に比べて若干繊細さを欠いたように見えるが、落ち着いた印象の風貌である。右側には淑女がたたずみ、右手には百合の花を、左手には本を持っている。マーシャルが1631年に描いた「淑女」も同じものを手にしていたが、衣装はチューダー朝に特徴的なものをまっていたのに対して、この新たな淑女は当時人気を博した女性のコスチュームプリントの影響を受けているかのように、ウェンセスラウス・ホラーによる作品に類似した姿となっている。¹⁶⁾

版画の四隅にはそれぞれ4つの枠があって、合計16の枠の内部には本文中の各章のタイトルがエンブレム的な挿絵を添えて示されている。左側8枚が紳士、右側8枚が淑女の項目である。

上部左側の枠から見ていくと、「若さ」、「性質」、「教育」、「職業」がある。「若さ」では、空の雲から手が現れて、差し出す壺から水が出て、若い芽を潤しているという様子が描かれている。「性質」では、やはり雲から手が現れ、若者に本と剣を差し出している。「教育」では、膝に本を載せた女性が中央にいて、その周囲にはリベラルアーツ7科目のシンボルが描かれている。中世ヨーロッパで教養ある者の必須科目とみなされてきた文法・修辞学・弁証法・算術・幾何学・天文学・音楽の7つである。「職業」では船の絵の額縁を背景に、金槌と鉄床がある。下の4枚は、「余暇」、「交際」、「節度」、「完成」である。「余暇」は田舎の狩猟の様子が描かれていて、馬に乗る男性が、他のふたりと3頭の猟犬とともに鹿を追っている。「交際」では、左右から伸びる手が握手をしている。「節度」では、男性があずまやの中のテーブルに肘をついてもたれかかる様子が描かれている。足元には堅実を意味する亀がいて、その後ろには平穩を象徴する海鳥が岩に巣作りをしている。「完成」では男性の頭が雲の中から出て、空の上から伸びる手が差し出す王冠を受け取ろうとしている。

つぎに『イングランドの淑女』部分に注目してみよう。右上の枠を見てみると「装い」、「振る舞い」、「礼儀」、「品位」がある。「装い」では、カーテンの向こうに、3枚のドレスと宝石箱が置かれたワードローブが見える。「振る舞い」では、ドレスを着た女性が丁寧なお辞儀をするようにスカートを持ちあげている。ウェンセスラウス・ホラーのコスチュームプリント (*Ornatus muliebris Anglicanus* のNo. 9) にこれとよく似た作品がある。「礼儀」では、カーテンのある部屋の中で椅子に座って、鏡に映る自分の姿を見る女性がいる。胸元には花を持ち、テーブルにはネックレスと羽が置かれている。「品位」では、剣をたずさえた派手な衣装の男性が、女性に仰々しくアプローチしている。その様を馬鹿にしているの

か、女性は足元にいる果物を持ったサルを指さしている。右下の四枚は、「節操」、「審美眼」、「優雅」、「名誉」である。まず「節操」では、腰掛けている女性に対して、空から財布と剣を差し出す手が見えるが、その両方を女性は拒絶している。「審美眼」では、腰を掛けた女性がミニチュアの肖像画を持っていて、それをカーテンの向こうにある大きな肖像画と比べている。「優雅」においては、ドレスを着た女性が楕円形の額縁の家系図を指さしている。3つの紋章から家系図が伸びていて、紋章の下には鎌、骸骨、砂時計という人間の死すべき運命の象徴がある。「名誉」では、王座のような椅子に座る女性が腕を広げていて、右手にはステッキを持っており、足元には犬と孔雀がいる。以上のことから暗示されるメッセージが『イングランドの紳士』、『イングランドの淑女』の中核をなす。

『女重宝記』は5巻からなり、第1巻においては「女中万たしなみの巻」として未婚の女性がたしなむべき事柄を扱っている。芸事や言葉遣い、化粧や身だしなみ、衣服のことなどが含まれる。身分の高い者の言葉遣いも、庶民が覚えて用いることができるように書かれている。さらに挿絵によって具体的に芸事の種類や日用道具の名前が示されている。第2巻は「祝言の巻」とされ、婚姻に関連する行事の作法が説明されている。食事についてのしきたりも大変具体的である。第3巻は「懐妊の巻」であり、妊娠・出産について詳しい説明がなされる。第4巻は「手習いの事、文書く事」とされ、楽器や文学、香の調合などの知識が扱われる。第5巻は「女節用集字尽」で、女性が日常使用する言葉や文字のいわば辞書である。欄外には挿絵があって、組香の種類が示されている。最後には小笠原流の包の礼法が図を添えて記されている。組香も包結も中世までは上流階層の文化であったが、この頃には一般市民の生活にも取り入れられるようになっていたことを意味するものであろう。

『男重宝記』も5巻からなり、第1巻「致知之部」では社会の組織、階層を説明、それぞれの心構え等が示されている。第2巻「格物之部」では手習

いから文学の作法までをまとめている。漢詩、和歌、連歌、謡などの決まりごと、心得が記されている。第3巻は茶の湯、華道、囲碁将棋の決まりごとを扱っている。第4巻は「翰札之巻」で、弔状、祝言状の書き方、書状の作法、菓子の種類を詳解する。第5巻は『女重宝記』と同様に日常生活で覚えるべき言葉を集めた辞書となっている。最後には普段の生活における礼儀作法、しかるべき立ち居振る舞いが記されている。

『女重宝記』、『男重宝記』ともに口絵というのはないのだが、挿絵はところどころに使用されていて、読者の理解を促すようになっている。たとえば『女重宝記』第2巻では、食事のマナーとして文章で説明していることを図解するところがある。挿絵では、版画一枚が4つの部屋に分かれていて、各部屋に一人ずつ食事をする女性の姿がある。そうめん、まんじゅう、飯、ちまきを、それぞれ正しい作法で食べる様子が描かれている。

比較してみると、日本の重宝記のほうが日常生活に密着した実用的知識がより多く見受けられる。一方、中には似通った事柄もあり、些細な部分においても共通点が見いだせる。たとえば、『イングランドの淑女』『女重宝記』双方が医療的な知識について扱っている。これは、女性が家族や自分自身の健康を維持する存在としてみなされていたからであろう。4種の書物においては、衣類や身だしなみなど日常的・実用的な助言と、徳や品行に関する精神的・規範的な助言が混交して取り入れられていることも共通点である。

むすび

ブレイスウェイトの著書は、イタリアルネサンス期の教養ある宮廷人を模範とし、それを英国の紳士淑女のあり方にいわば応用して読者の徳性を涵養していくものとなった。中世から近世へと移行する中で、新たな規範を求めようとする時代の要請に応える内容であったことは間違いない。17世紀の日本においてもそれは同様であった。とくに17世紀後半には文治政治のもと、洗練された礼儀作法を身につけることが人々の関心事に含まれるようになり、それは上層階級に限定され

ない範囲に及んでいった。重宝記は、中世の次の時代となる近世的な社会となって、文学・芸術・学芸が花開いた元禄時代の頃に流行が始まった。知識が重視され、教育が重んじられるようになったことを『女重宝記』、『男重宝記』の普及から読み取ることができる。『女重宝記』が版を重ねた背景には女性による読書の文化の広がりがあり、また、『男重宝記』に関して言えば、商業と都市の発展によって、商人として台頭していく男性にとって、たしなみや行儀作法の知識が必要とされる時代となったことが示唆されるものと考えられよう。これも近世的な特徴とみなすことができる。

これらの作法書は、若い人を読者層として想定していることもあり、言語自体は読みやすく、細かな項目に分かれ理解しやすい構成である。重宝記では振り仮名を施し、さらに挿絵もふんだんに入れている。このように、読み手に受容されやすい形で出版されたことも普及の一因であっただろう。ブレイスウェイトは『イングランドの紳士』の中で、本来はポケットサイズで気軽に持ち運べる本の制作を意図していたと書いている。実際には予定したよりも少し大きめの判になってしまったことを許してほしい、あるいは、ポケットを広げてほしい、と読者にユーモラスな調子で語りかけている。おそらくオクテボ判までならば容易に懐に入れて持ち運べるものとみなされていたはずだ。ブレイスウェイトは読者に対して、一回り大きなクォート判になってしまったことを承知してもらい、是非手に取ってほしいというメッセージを伝えたかったのだと考えることができる。

『イングランドの紳士』と『イングランドの淑女』は宮廷で有力な夫妻に献呈されている。1640年には合本として出版されていた点からも、この2冊が一对としてみなされ、このことから徳の高い紳士と淑女はたがいに相応しい存在であり、理想的なカップルとなるということが示唆されている。男女のあるべき姿、持つべき知識教養がそれぞれの本に詳述され、近世ならではの洗練された人間の理想像が提示されている。本論文ではこれらの書物の出版の背景を主に扱ってきたため、ジェンダーの問題は論じないこととしたが、たと

えば重宝記における男尊女卑の傾向は顕著であるので、検討対象とすることで17世紀の日英における理想的な男女像の比較研究において新たな知見が得られるだろう。また、本論考で踏み込んでいない宗教的思想の反映という問題についても今後検討すべき要素と考えている。

ブレイスウェイトと苗村丈伯によるこれらの作法書は、それぞれの国において近世という時代にふさわしい知識人を育成するために若い男女の啓蒙を目指して書かれ、時代の要請に応えるものとして広く受容され、さらにはのちのコンダクトブック、重宝記の発展につながるものとなったとすることができよう。

(2020年10月)

〔謝辞〕

本研究はJSPS科研費19K21631の助成を受けたものです。

注

- 1) 苗村の生没年は1674—1748とされることもあるが、『女重宝記』の出版が1692年であることを考えるといささか不自然である。長友千代治は『重宝記の調方記』（臨川書店、2005）の中で苗村の生没年は不詳であるとし、さらに苗村の最初の作が1667年の仮名草子であったことを記している。なお、重宝記及び江戸時代の若者向けの教養書については、長友氏による『女重宝記・男重宝記』（社会思想社、1993）、『江戸時代の書物と読書』（東京堂、2001）、『江戸庶民の読書と学び』（勉誠出版、2017）を参照した。
- 2) マルクス・トゥリウス・キケロー（Marcus Tullius Cicero, 106BC-43BC）の『義務について』（*De Officiis*）は、キケローが息子マルクスに宛てた書簡体形式で書かれている。日本語訳は高橋宏幸訳（岩波書店『キケロー選集9』の「義務について」）を参照した。
- 3) M. H. M. MacKinnon, "School Books Used at Eton College about 1600" *The Journal of English and Germanic Philology* Vol. 56, No. 3 (Jul., 1957), 429—433, University of Illinois Press
- 4) バルダッサーレ・カスティリオーネ（Baldassare Castiglione, 1478—1529）の『廷臣論』の原題は *Il libro del cortegiano*, 英訳は *The Book of the Courtier* である。ESTCによれば、ホービー（Thomas Hoby）による英語訳は1561年から1603年までの間に繰り返し出版された。本論考における日本語訳の引用は、清水純一他訳『カスティリオーネ宮廷人』（東海大学出版会、1987年）からとなる。
- 5) シドニー（Sir Philip Sidney, 1554-1586）の代表作であるパストラル『アーケイディア』（*Arcadia*）は国内外で読まれ、ソネット詩集『アストロフェルとステラ』（*Astrophel and Stella*）はエリザベス朝イングランドで大人気を博した。シドニーは戦場で負傷して命を落とすが、最期に見せた高貴な振る舞い（自分自身が負傷しながらも、近くで倒れた別の兵士に水を飲ませたというエピソード）は長く語り継がれている。
- 6) 『カスティリオーネ宮廷人』第四の書、pp. 621-623.
- 7) ピーチャム（Henry Peacham, 1578-c. 1644）の『完全なる紳士』（*The Complete Gentleman*）は1622年に初版が出され、その後、17世紀の間に複数回の出版を重ねた。
- 8) John Horden, "Peacham, Henry (b. 1578, d. in or after 1644), writer and illustrator." *Oxford Dictionary of National Biography*. 23 Sep. 2004; Accessed 30 Oct. 2020.
<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-21667>.
- 9) 長友千代治は重宝記のことを「中世を經過して近世に

至った洗練された学芸・歴史・政治・社会・風俗・有職・故実・倫理・実用等の多方面にわたる知識の最大公約の解説書、手引書」と言っている。長友千代治校註『女重宝記・男重宝記』(1993)、385頁。

- 10) 横田冬彦『天下泰平』(講談社、2002)第7章「開けゆく書物の世界」参照。
- 11) ブレイスウェイトの名字はBrathwaite, Brathwait, Brathwayte, Braithwaite, Braythwait, Braythwayteなど、当時は複数のつづりが使われていて、リチャード・ブレイスウェイトはとくに初めの3種を使用することが多かったという。Edmund Gosse, "Brathwaite, Richard (1588?-1673)." Oxford Dictionary of National Biography.; Accessed 30 Oct. 2020.
<https://www.oxforddnb.com/view/10.1093/odnb/9780192683120.001.0001/odnb-9780192683120-e-3290>.
- 12) ブレイスウェイト家が所有したバーンサイドホールはほぼ廃墟となった中世の建造物が現存している。
- 13) ODNBに掲載されていない書籍商についての情報は、H.R. Plomer 他による *Dictionaries of Printers and Booksellers, 1557-1775* (The Bibliographical Society, 1977) を参照。
- 14) 萬屋清兵衛と伊丹屋太郎右衛門は井原西鶴の浮世草子を刊行している書肆として知られる。
- 15) 長友千代治『重宝記の調法記』(臨川書店、2005)、3頁。
- 16) たとえばホラーのコスチュームプリント集 *Ornatus muliebris Anglicanus, or, The severall habits of English women* (1640) においては、立ち姿、風貌がマーシャルの「淑女」と類似している例が見受けられる。